

南河内郡の古墳にせまる!!

46期生

I テーマ設定の理由

ぼくは今、大阪府羽曳野市に住んでいますが、今年の2月末に引越してきたばかりなので、自分の家の周りのこともあまり知りません。そこで、この機会に少しでも近くのことを知ろうと思い、日本でも屈指の古墳群“古市古墳群”について調べることにしました。

II 研究方法

- (1) 資料を集める。
- (2) 地図を利用して古墳の場所を調べる⇒現地にいき、いろいろと調べる。
- (3) 教育委員会・資料館にもいく。

III 研究内容

1. 古墳をつくる

1) 古墳をつくる人々

古墳づくりのために集まった人々は大きく二つの集団からなっています。まず、基本設計などにたずさわる人で、高度な技術をつけた、いわば“頭脳集団”です。これらは少人数です。もう一つは実際に古墳を造っていく“労働にあたる大集団”です。この2つが基礎となるのですが、その他、事務をすすめていくしっかりとした“事務機構”も必要となります。これは、大集団に食料を供給したり、必要な道具をいつでも使えるように準備をするなど平凡だがなくてはならない役割を果します。

2) 古墳をつくる

①土木工事に適した所を選ぶ

誉田山古墳のような、巨大な墳丘を築くには場所の選び方にもとくに慎重にあたらなければいけません。ただ、二ツ塚古墳の存在によって大きく形がゆがめられていることからわかるように誉田山古墳の場合、二ツ塚古墳がすでに築かれていたのでしかたなしに氾濫原(図1)をうめて、その上に墳丘をつくったそうです。

②設計図を布などにかく

③地面に平面形を表す杭を打つ

④土を掘る・運ぶ

濠になる所では、たくさんの土を掘り、また、その土を墳丘部に運んでいきますが、いったいどのようなもので土を掘ったり運んだりしたのでしょうか。



▲図1 氾濫原の位置

南河内郡の古墳にせまる!!

46期生

I テーマ設定の理由

ぼくは今、大阪府羽曳野市に住んでいますが、今年の2月末に引越してきたばかりなので、自分の家の周りのこともあまり知りません。そこで、この機会に少しでも近くのことを知ろうと思い、日本でも屈指の古墳群“古市古墳群”について調べることにしました。

II 研究方法

- (1) 資料を集める。
- (2) 地図を利用して古墳の場所を調べる⇒現地にいき、いろいろと調べる。
- (3) 教育委員会・資料館にもいく。

III 研究内容

1. 古墳をつくる

1) 古墳をつくる人々

古墳づくりのために集まった人々は大きく二つの集団からなっています。まず、基本設計などにたずさわる人で、高度な技術をつけた、いわば“頭脳集団”です。これらは少人数です。もう一つは実際に古墳を造っていく“労働にあたる大集団”です。この2つが基礎となるのですが、その他、事務をすすめていくしっかりとした“事務機構”も必要となります。これは、大集団に食料を供給したり、必要な道具をいつでも使えるように準備をするなど平凡だがなくてはならない役割を果します。

2) 古墳をつくる

①土木工事に適した所を選ぶ

誉田山古墳のような、巨大な墳丘を築くには場所の選び方にもとくに慎重にあたらなければいけません。ただ、二ツ塚古墳の存在によって大きく形がゆがめられていることからわかるように誉田山古墳の場合、二ツ塚古墳がすでに築かれていたのしかたなしに氾濫原(図1)をうめて、その上に墳丘をつくったそうです。

②設計図を布などにかく

③地面に平面形を表す杭を打つ

④土を掘る・運ぶ

濠になる所では、たくさんの土を掘り、また、その土を墳丘部に運んでいきますが、いったいどのようなもので土を掘ったり運んだりしたのでしょうか。



▲図1 氾濫原の位置

土を掘るには、クワ・スキの二種が基本となります。クワは身に対して斜めの方向に柄がつくものです。スキは身に対してまっすぐに柄がつくもので、クワ・スキとも、接合したもの（身と柄を別々に作ったもの）と共づくりのもの（身と柄をいっしょに作ったもの）があったそうです。

いっぽう土を運ぶ時には、モッコとオウコ（図2）を使って墳丘部に土を運びました。日本ではモッコとオウコをいっしょに使い、1日1人あたり2～3㎡もの土（1㎡の土＝約1.5t）を運んでいたそうです。



▲図2 モッコとオウコ

- ⑤水平を確認しながら墳丘を築く
- ⑥ふき石をはる（ふき石…3. 古墳の構造, 2）参照）
- ⑦埴輪をすえる（埴輪…3. 古墳の構造, 2）参照）
- ⑧石室に石棺をすえ遺体・副葬品をおさめる（石室…3. 古墳の構造, 1）参照・石棺…4. 主な棺の種類, 2）参照）

2. 墳丘のかたち

1) 主な墳丘のかたち

①前方後円墳

円墳にくらべると前方後円墳の数はきわめて少なくなります。しかし、日本の古墳を墳丘規模の順にならべると1位～45位まではすべて前方後円墳ということになりわが国の古墳の中では最も重要と考えられた墳丘であることはたしかです。なお、これはかぎ穴のような形をしていて普通は3段に築かれています。

②前方後方墳

前方後方墳とは、前方後円墳の後円丘を方丘にしたものです。数はとても少なく現在でも約二十基が確認されているだけです。

③円墳

墳頂部に平坦面をもつ截頭円錐形の古墳です。数は日本の古墳の中では最も多く、全国に分布しています。

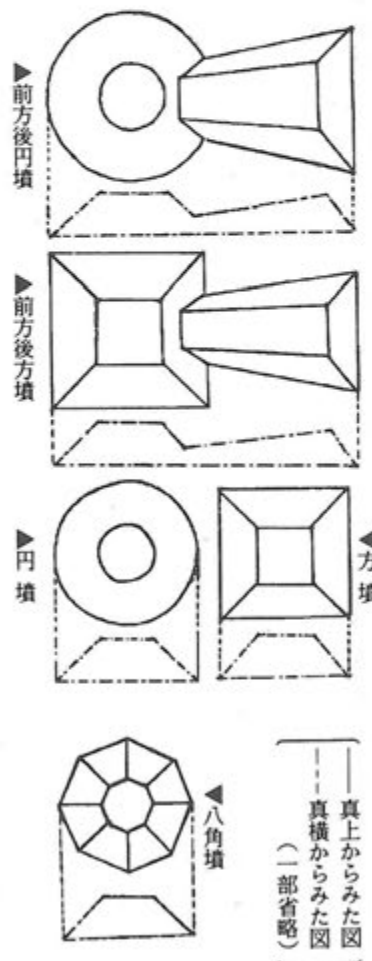
④方墳

墳丘の平面形が方形を呈する古墳で截頭方錐形につくられています。なお、方墳の平面形は基本的には正方形ですが現推古天皇陵のように長方形につくられているものもあります。

⑤八角墳

平面形が八角形を呈する古墳で7～8世紀にかけてつくられた天皇陵です。

※その他にも「上円下方墳」などがあります。



▲図3 主な墳丘のかたち

2) 墳丘のかたちとそのうつりかわり

※ここでは、古墳時代を、前期・中期・後期・末期の4つにわけています。

前期 前方後円（方）墳の出現から水をたたえた周濠が出現するまでの段階で、3世紀後半ないし末葉から4世紀後半ないし末葉までと想定されています。前期初頭はず、前方後円（方）墳として、西日本各地に出現します。そして中頃になると一部の地域では方墳など前方後円（方）墳以外の墳丘をもつ古墳も出現します。またこのころの被葬者の頭位は北を向くものが多いようです。後半になると水をたたえた周濠が出現しますが、周濠と墳丘部とが同じ形をしていて、幅もせまいので、完全な周濠とはいえません。

中期 最も巨大な前方後円墳が営まれた時期で4世紀後半ないし末葉から5世紀末までと想定されています。このころになると造出し（3.参照）をもつものが一般化し、畿内では周濠が発達します。（前方後円墳の前方部が後円部より高くなるのも、この時期です。）

後期 横穴式石室が一般化する時期でほぼ6世紀にあたります。まだ最も重要な墳丘形式は前方後円墳です。（群集墳もたくさんつくられました。）

末期 前方後円墳が姿を消して以降の時期でほぼ7世紀にあたります。ただそれ以降も円墳や方墳はしばらく造り続けられます。なお、この時期で特に注目されるのは、大王（天皇）だけが八角墳を営んでいるということです。そして、かつて前方後円墳を営んだ豪族も7世紀の前半までは巨大な円墳・方墳を造営しますが、後半になるとそれも姿を消し、大王（天皇）家とそれを取りまく一部の支配者のみが古墳を営むようになるようです。

3. 古墳の構造

1) 古墳の埋葬施設

①竪穴式石室

竪穴式石室とは、墳頂部に穴をほってそのまわりに石をしきつめたもので、そのなかに、埋葬を行います。主に前期から中期にかけてつくられた埋葬施設です。

②粘土槨

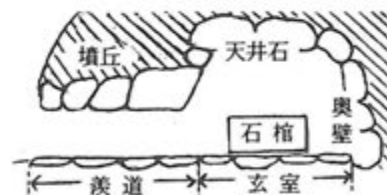
土壌内に置かれた木棺を粘土で包み込んで埋めた施設で、和泉市黄金塚古墳や羽曳野市駒ヶ谷宮山古墳のように、排水溝をもつものが多いそうです。

③横穴式石室（図4）

これは墳丘の横に入口をもち、埋葬する前に仕上げた施設です。なお、この施設が一般的なものとなるのは後期に入ってからのことです。

④横穴式石槨（図5）

これは、末期に大和・河内で用いられた、石棺だけを納めるような施設を持ったものです。河南町観音塚古墳（写真1）のように前室と羨道を付加したもの・河南町オウコ8号墳のように羨道を付加したもの・羽曳野市小口山古墳のように横穴式石槨のみのものと大きく3つに分けることができます。

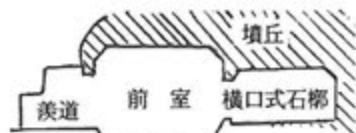


▲図4 横穴式石室の構造

2) 古墳の外部の施設

① 周濠

日本でよく周濠（墳丘の周りに水をたたえた濠）をめぐる古墳が見られますが、これは古代文化のもととなった中国や朝鮮半島にはみられないものでわが国の古墳の特色の一つと数えられるのだそうです。



▲図5 横石式石槨の構造

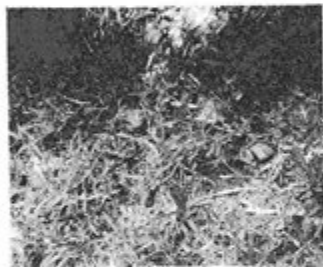


▲写真1 観音塚古墳

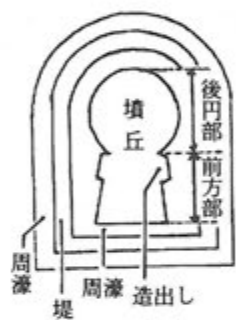
周濠が古墳に用いられるようになったのは前期の後半だそうですが、そのころの周濠は、はばもせまく、輪郭も墳丘と同じ形をしているという初源的なものでした。それが中期になると典型的な周濠の形式が完成するようです。しかし後期になると、あまりつくられなくなり墳丘部だけの古墳が見られるようになります。

② ふき石 (写真2)

これは墳丘の斜面にだけふかかれている（墳頂上の広い平坦面や各段のテラス上にはふかかれていません）石のことです。なお、この石の大きさは犬や猫の頭くらいで、すきまなくならべられていることから墳丘の斜面を保護するためにふいているのだらうと考えられています。



▲写真2 ふき石



▲図6 典型的な古墳の部分名称

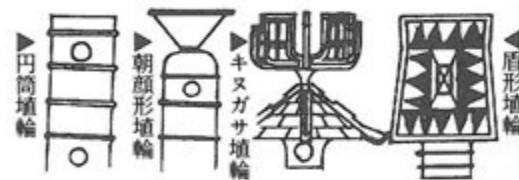
③ 造出し

中期以降の前方後円墳に見られるもので、くびれ部に設けられています。なぜこのようなものがつくられたのかについては、まだはっきりしていませんが、たぶん祭壇として設けられたのだらうと言われています。

④ 埴輪

ア. 円筒埴輪

埴輪の中では（といっても、円周埴輪と形象埴輪の2種類しかありませんが）最も数の多い埴輪です。墳頂部や各段のテラスの周りにならべられた円筒の埴輪で、地上にでている部分は朱を塗っていたようです。



▲図7 埴輪

イ. 形象埴輪

数は円筒埴輪にくらべて数は少ないですが種類はいろいろとあります。よく利用されるのは、円筒埴輪の間におかれる朝顔形埴輪・円筒埴輪列の外側におかれるキヌガサ埴輪・祭壇をかこむ盾形埴輪などで、その他にも家・馬・人などの埴輪があります。

4. 主な棺の種類

1) 木棺：文字どおり木でできた棺です。木はくさりやすいために、もとの形で出土するようなことはありません。したがって、どのような棺であったかを知るには、棺の下に敷いてあった粘土床を利用して調べます。

ア. 割竹形木棺

後期の半ば過ぎまで用いられたもので長さ6~7メートル・径1メートルもある大木を縦に2つに割り、その内部をくり抜いて棺にしたものです。

イ. 組合式木棺

板材を組み合わせてつくったもので長さは2メートルくらいです。（後期後半になると釘を使用したものもできます。）

2) 石棺：棺の中で一番のこりがよいのがこの石棺です。これは木棺よりも新しく、横石式石槨にも用いられました。

ア. 割竹形石棺

割竹形木棺と同じく、刳抜式で長さは3メートルくらいです。

イ. 長持形石棺

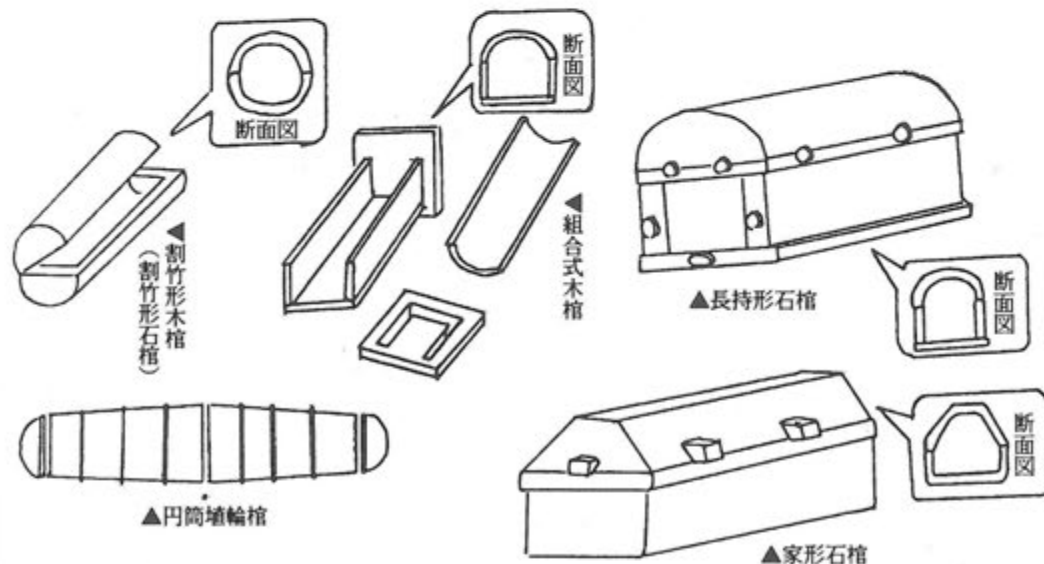
組立式の石棺で主に竪穴式石室に採用されました。（中期になるとふたに彫刻装飾をもつものもできます。）

ウ. 家形石棺

後期から末期にかけて用いられた石棺です。長さは2メートルくらいで主に横穴式石室に採用されました。

3) 円筒埴輪棺

円筒埴輪を棺に転用したもので、ほとんどが副葬品をとまいません。



▲図8 主な棺の種類

IV 結論(まとめ)

1. 古墳とは3世紀から8世紀にかけてつくられた、大王や豪族の墓のことである。
2. 古墳は大勢の人々が何年もかけてつくったものである。
3. 日本で最も重要とされてきた古墳は前方後円墳であるが、数は円墳・方墳の方が圧倒的に多い。
4. 古墳の大きさのちがいは、勢力や位によるちがひ(勢力が大きかったり位が高かったりするほど、古墳の大きさは大きくなる)と時期的なちがひ(前方後円墳は中期に、円墳・方墳は末期に最も大きなものが造られる)によるものである。

V 反省・感想

ぼくは考古学者でも歴史大好き人間でもないのに、「基本的なこと」について調べていきましたが、調べていくうちに、どんどん「専門用語」がでてきて全部理解することができなかつたため説明不足の所も多かつたように思えます。しかし、この古墳という一つのことを調べるにより市役所や図書館の場所などもわかり、少しどころかたくさん、自分の家の周りを知ることができ、自分なりによかつたと思います。

VI 参考文献

- ・白石 太一郎 (1985) 『古墳の知識』(I 墳丘と内部構造) 東京美術 168p.
- ・羽曳野市教育委員会 (1992) 『歴史の散歩道』(第5版) 151p.
- ・村井 嘉雄ほか (1988) 『古墳の知識』(II 出土品) 東京美術 32~148p.